

バトンゾーン

先輩から後輩へ⑤

元宮教組委員長であり、3月で学校を離れ、4月からみやぎ教育文化研究センター所長になった

たかはし たつろう

高橋 達郎先生 のミニ講座です。

様々な学習会が中止される中で、
ここが学びの場となればと思います。



「学び合う授業・学級」づくりのポイント

～授業づくり、「発問」の問題を考えよう！（下）～

前回、教師が「発問」すると子どもたちは「五つの分裂」を起こすこと、そして、その分裂を利用して子ども同士の「つながり」「働きかけ」を作っていくことを述べました。

しかし、学習の苦手な子ども（前号「分裂」②B「分裂」③Bの子ども）は、教師の発問中心の授業ではどうしても受け身になり参加しにくいのです。

では、どうするか？それは、Bの子どもたちが「わからないところ」「知りたいこと」をクラスみんなに出すこと、つまり、答えを知っている教師の発問ではなく、答えを知らない子どもから疑問を出させ、それをクラスみんな考え合っていく授業に転換すればいいのです。「『わからない』という子は王様だ！」が、ここに位置づくのですね。

私の経験では、子どもたちの疑問は、私の発問したいこととほぼ同じで、さらに教師の発問を超える疑問がたびたび出されます。教師は子どもと一緒に考えていきます。さらに「先生はここが疑問だけど、みんなはどう思う？」という形で子どもが出さなかった課題を教師から出し、みんな考え合っていくクラスを作っていきます。そうすることで、学習の苦手な子どもが授業に位置付き、

さらに「〇〇さんのおかげで授業が深まった」と教師がほめることで子どもの意識、クラスの意識を変えていきます。さらに、疑問を出した子どもに「君はどう思うの？間違ってもいいから『たぶん、～だと思います。』と言ってみて。」と思考を促し、そして言えたら、「〇〇さん、すごい！自問自答ができた！」と、子どもの「自問自答」を導いていきます。

3年生のとき悪口や粗暴な行動で転校生も出したやんちゃな4年生を担当。4月から子どもの疑問をもとにみんな考え合う授業をしてきました。7月、国語『世界一美しいぼくの村』の授業で学習が苦手なAさんが「どうして父さんはヤモ一人で売らせるのか」と疑問を出し「自答します。それは、たぶん、ヤモをたくましくするためではないか」と発言。それをめぐって、話し合いになりました。「振り返り」で何人もの子どもが「Aさんのおかげでよくわかった。」と書き、ある子は「次回もみんなに期待したい」と書いたのです。やんちゃな子どもたち、学習の苦手な子どもたちが授業のたびに「〇〇君、〇〇さんのおかげ」と感謝され、穏やかで「考え合う」クラスに変わっていったのです。

10/31(土)

【全体会・シンポジウム 10:00～12:00】

「コロナ時代の子供たち～教育はどうあればいいのか～」

★パネラー

- ・岩倉 政城さん
(尚綱学院大学付属幼稚園元園長・新日本医師協会前会長)
- ・小林 愛さん (小中学生のお子さんを持つ保護者)
- ・山沢 智樹さん (東北生活文化大学短期大学部講師)

★コーディネーター

遠藤 利美さん (中学校教諭)

参加申込みはこちらから

詳細は宮教組HPで！



10/26(月)

切



Check!

2020
子どもの未来をひらく
みやぎ教育の
今年も
オンラインで！ つとみ YouTube Live
同時配信！
WEB会議アプリ「Zoom」での開催決定！！

【記念講演 13:20～15:00】

「逆境を乗り越え、
ともに生きる」

講師

サヘル・ローズさん



【プロフィール】

1985年イラン生まれ。8歳で来日。日本語を小学校の校長先生から学ぶ。映画や舞台で女優として活動の場を広げている。芸能活動以外にも、国際人権団体のNGOヒューマン・ライツ・ウォッチ (HRW) で「すべての子どもに家庭を」の活動を支援している。